白

淡々と時間は流れて行きます
人々の哀れむような眼差しが私を包み込みます
がその理由を知りません
知る必要もありません

特に強く想いを抱くこともなく
哀しみは常に温かく
喜びはいつも空気のようで
心はただ、水面が揺れるように揺れているだけです

存在の重みというものがあると聞きましたが
いまだ、私にはそれをこの掌に感じることはありません
焦燥というものがあると聞きましたが
その正体すら私にはよくわかりません

私が桜を好きなのは
ずっと好きでいるのは、たぶん
淡く透明なその花びらの故です
陽光と影とを同時に纏ってひらひらと舞うから

その花びらが舞うとき、その木を見上げます
若葉を育てるがために花を散らせる、その木を
自分が歩いてきた年月への祝福
とこれから歩いて行こうとする時間への祈りとに

人はその姿を「儚い」と愛しみますが
私はその感覚を知りません
素朴で単純な毎日を生きているだけだから
私も、その木も

(2001.3.15)